

大学生のコミュニケーション育成のためのパターン・プラクティスの試み

江口 京子*¹、早瀬 博範*²

Pattern Practice for Improving College Students' Communication Ability in English

Kyoko EGUCHI*¹, Hironori HAYASE*²

要 旨

本稿では、英語を専攻していない標準的な大学1年生に対して行った英語の授業をもとに、スピーキングにおける自己表現能力の育成を目指し、近年その学習効果が見直されてきているパターン・プラクティス（定型表現）を取り入れたアクティブ・ラーニングの試みを検証する。パターン・プラクティスの長所である基本的な文型や表現を身につけることを授業の核に据えながら、短所とされてきた、暗記や反復学習の単調さや実践的なコミュニケーションに転化する難しさに対し、充実したコンテンツの選択、授業外学習の設定、反復練習の多様化、ペアワークの実践、英作文作成、そして担当教員によるオーラルテストの実施などによって複合的に補った。その結果、オーラルテストや学生たちによるセルフアセスメント、及びアンケート調査では、約8割の学生に一定の自己表現能力の向上を確認することができた。

【キーワード】 自己表現能力 スピーキング pattern practice for communication アクティブ・ラーニング

1. はじめに

グローバル人材の育成として英語のスピーキング力の重要性が高まる中、2016年に文部科学省が日本人高校生に対して行った「2016年度英語力調査結果速報」によると、英語の4技能の中でライティングとスピーキングの能力、特にスピーキング力が著しく低いことが示された。そして、2017年7月31日に文部科学省は、大学入試における大学入学共通テストとして、英語に関しては英検やTOEIC、GTECといった外部資格試験の導入を決定した。これは、現在のセンター試験では、ライティングとスピーキングの能力を問うことが難しいためにとられた措置であるが、大学入試に加えることで書く、話す能力の底上げが期待されていることは明らかである。

*¹ 佐賀大学全学教育機構（非常勤）

*² 佐賀大学全学教育機構（併任）

大学においては、外国語教育だけでなく、大学教育全般で、アウトプットの強化に向けたアプローチが始まっている。佐賀大学では2017年に「学生が主体的に学ぶことができる能動的学修」として、アクティブ・ラーニングの推進の本格的導入が始まった。具体的には、従来型の「教員による一方的な講義形式の教育」ではなく、「他者との協働を伴った『書く・話す・発表する』等の思考を活性化する活動』」を重視する学習法が推進されている。では、実際の英語の授業の中で、アクティブ・ラーニングの効果を引き出してスピーキング力向上を図るには、どのような取り組みが必要だろうか。

英語教育の現場ではコミュニカティブ・アプローチが主流である中、コミュニケーション能力に結びつかないという批判によって教室から姿を消していたパターン・プラクティスが近年再評価されてきている。本稿は、大学の英語の授業に、定型表現の習得法としてのパターン・プラクティスの効果に着目し、学生同士の協働などを通じたアクティブ・ラーニング型の授業の中で、自己表現につながるスピーキング能力の向上を試みるものである。

2. パターン・プラクティスについて

2.1. 歴史

より効果的な英語のスピーキング力育成に向けては、戦後の日本における英語教育の教授法は時代とともに変遷を遂げてきた。まず第二次世界大戦後から1960年代までアメリカで一世を風靡した教授法オーディオリンガル・メソッドが導入され、文法的な技術を口頭練習によって習得するパターン・プラクティスはその中心的な指導法だった¹。しかし、その後立脚する理論に対する批判²の高まりとともに、暗記や反復練習が中心の単調な学習法や実際の会話では「話せない」と、その学習効果に批判や疑問が相次ぎ、授業で積極的に取り入れられてこなかった。1970年後半以降は文法学習よりも話す状況や機能を中心にした表現形式の習得を重視するコミュニカティブ・アプローチが主流となる³。言語運用（コミュニケーション）能力を高めることに重点を置き、学習者が主体の授業を目指すこのアプローチは、1990年代以降現在では主流の教授法として多くの学校英語に取り入れられている。導入から30年近くが経とうとしているが、先述の高校生に対する調査結果から判断すると、期待した効果が得られているとはいえない。

2.2 再評価

こうした状況の中、近年、さまざまな言語の教授法において見直されているのが、パターン・プラクティスである。特に学習言語とは異なる日本語を母国語とする場合、社会的な英語運用能力を高めるために、文法的な言語技能を習得する必要性が再認識され、授業に取り入れられてきている⁴。後関（2005）は、中学校の英語教育においてパターン・プラクティスが重要である理由に、日本人にとって英語が母国語とは「まるで異なった言語体系」である点を挙げ、体系の違う言語を学ぶ以上、基礎的な発音や文型を「きちんと」習得する必要

があると強調する⁵。また、外国語学習者における成功者の学習方法の検証を行った竹内（2003）は、上位成績者と下位成績者が用いた学習法を比較し、スキル別学習方略として、スピーキングに効果的な学習法は、初期から中期における徹底的な暗記と構文練習であることを示した（91-92）。フランス語の授業にパターン・プラクティスを導入した平嶋（2007）も、この学習法で習得可能な「純粋な言語操作能力」がコミュニカティブ・アプローチで目指す「コミュニケーション能力」の一部でしかないこと、また文法能力は実際のコミュニケーション活動の中で身につける学習法が「理想的」であると認めながらも、竹内による学習成功者の例も論拠に、学校教育の限られた条件の下で行うパターン・プラクティスの有効性を論じている（84）。

以上のように「ひと昔前」の指導法として人気のなかったパターン・プラクティスが、近年、コミュニケーション能力を高めるための基盤を形成する役割として再評価されてきている。大学の授業で導入するには、学習法や効果のマイナス面とされてきた点を補うこと、大学生は中学・高校6年間の英語教育で基本的な文法・語彙を習得してきた中級の学習者であるために、文型中心の網羅的な文法習得ではなく、日常的によく使うテーマや状況を設定し、表現の中で基本的文型や定型句を学ぶといった工夫をすることで、有効な学習法となる可能性は高い。

2.3 パターン・プラクティスの種類 長所と短所

パターン・プラクティスは口頭による暗記と基本構文の反復練習が基本であるが、大きく分けると代表的な文型による練習と、状況や場面によってよく用いる構文や表現の仕方を習得する会話中心の練習がある。前者は基本の枠組みの中で、名詞の数、人称、時制などの変化による動詞の活用などを、単純なものから複雑なものへ置き換える練習を「正確に」「素早く」「口頭で」網羅的に行うことで、「語彙・文法技術の習得と自動化」が期待される。平嶋（2007）は練習によって、「語彙や構文が音声とともにインプット」されることで「言語基盤」の形成、及び動詞の活用などの「文法技能の自動化」（85）を学習効果として挙げている。

また、後者は、コロケーション（ことばの結びつき）を基盤とし、人との会話において発話の場面や状況を設定し、そこでよく使われる表現、定型句を習得し、さまざまな感情を表現する際の定型表現を習得する練習である。長所は会話のやりとりをスムーズにすることで、人との対話や相互関係を築くことが期待される⁶。今回は、学習者が大学生であり、中学・高校6年間の英語教育で基本的な文法・語彙を習得している前提であるために、網羅的な文法習得を目指す文型中心型ではなく、テーマや状況に応じた表現中心のパターン・プラクティスを導入した。

一方パターン・プラクティスに共通する欠点は、暗記や反復練習など習得方法の単調さ、練習量の多さ、練習に用いられる文自体の無味乾燥さ、さらに時間と労力のかかる練習の割

には実際の会話に結び付かないことである。平嶋は、こうした欠点を1) 形式習得重視による「意味の欠如」、2) 練習形式の「単調さ」、3) 文脈の欠落による「現実のコミュニケーションへの転化の困難さ」、の3点に集約している(86)。本稿ではこうしたパターン・プラクティスに内在するマイナス面に対して、3.1項で、抵抗や飽きを感じがちな音読練習や反復練習に対する改善策や、実際の会話につながるような方法をアクティブ・ラーニングが提起する学習法を足掛かりに検討する。

3. アクティブ・ラーニングと英語教育

溝上(2015)はアクティブ・ラーニングを「一方向的な知識伝達型講義を聴くという(受動型)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く、話す、発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化⁷を伴う」(32)と定義する⁸。溝上によると、「書く、話す、発表する」などの活動は、ただ「聴く」だけでは働かない認知機能が「知識」と絡み合って、思考、判断、問題解決意識など、学習者の内部で起こる認知過程を外部に出すような学習法の具体的な例であり、この「活動への関与」と「そこで生じる認知プロセスの外化」の十分な「協奏」が重要だと論じている(33-34)。

アクティブ・ラーニングを「思考を活性化する学び」と捉える竹内(2015)は、英語の授業においては「知識・技能を統合して思考を深め、その結果を自ら判断して表現(発信)しながら、(何らか)の目的を達成してゆくような学び」と表現する。さらにここで大切な点は「知識や技能の定着」という基盤と「思考を深める」という活動との両方を「連動」させることだと強調する(3)。この「知識や技能の定着」のためには、先に見てきたようにパターン・プラクティスは効果的な学習法である。換言すると、パターン・プラクティスを基盤に「思考を深める」ような「書く、話す、発表する」活動を関与させることで、自己発信型のスピーキング力を目指す学習法が、効果的なアクティブ・ラーニングであることを示唆している。

3.1 パターン・プラクティスの問題点への解決策

アクティブ・ラーニングではペアやグループといった「協働」による学びが活動の中心であるが、他にも「多種多様な形態」(竹内2015: 2)や技法が存在しており、中には「小テスト」、「振り返りシート」「宿題」など従来教育現場で用いられてきた方法も多い。2.3でパターン・プラクティスの欠点として挙げた問題点に対しては、対処法として、次のアクティブ・ラーニングの形態や技法(下線部)も授業に取り込むことで、改善を試みた。

- 1) 内容への改善策: 設定された会話の背景、文脈についてペアやグループで練習する際、十分確認し合う。学生が関心をもつような、テキストのコンテンツの充実。
- 2) 単調さの軽減、練習の効率化への改善策: 「ヴァリエーション」と「シミュレーション」。暗記・反復練習を教室でのリピーター練習、ペアワーク、授業外学習に振り分け

ることで飽きずに練習するように設定。ペアワークではチェックシートを用いてモデル文の練習に加え、互いに自分の場合を想定して情報（感情、意見）を表現し、評価し合い、練習を多様化させる。授業外学習での反復練習の定着度確認にはオーラルテストを実施、学習成果の振り返りをする。

- 3) 実際のコミュニケーションのための改善策：「自己表現」英作文で自分の言いたいことを表現する。意見をまとめた上で、ペアで意見交換する。

4. 授業の展開

4.1 授業の目標

中級クラスの大学1年生に対して2017年度4月から約8か月間にわたり英語による自己表現能力の向上を目指し行ってきたコース（Listening, Writing, Speaking）の授業では、それぞれにスキルに対する目標が下記の通りである。

Listening：日常的な事柄に関する短いディスコースを聴き取り、基本的な内容を概ね理解する事ができる。

Writing：基本的な構文を使って、日常的な事柄について単文や複文が概ね正しく書ける。

Speaking：基本的な構文を使って、日常的な事柄について単文で概ね正しく言える。

特に、今回担当教員は、Speakingについて、1) 聞かれたことに答えられる、2) 言いたいことが言える「自己表現」、を基本に、3) コミュニケーション能力としての会話のやりとりができるようになることを最終的な目標に掲げた。

4.2 テキストのコンテンツ

今回の授業で扱ったテキスト、および授業での使用法は次の通りである。

テキスト：*English Listening and Speaking Patterns 2*（南雲堂）

対象学生レベル（TOEIC350-550）

テキストのユニットは、個人の生活に関わる事（例：family, friends, feelings）、興味などに関わる事（例：music, traveling, art）、一般的に議論に上る事（例：culture, education, government）など、大学生の日常生活でよく用いられるテーマごとに設定されている。各ユニットの構成は4つのセクション：I 語彙、II 対話、III 会話の定型表現、IV 関連表現（Q & A形式）からなり、以下は授業で行った学習の形態、進め方と概要である。IとIIは事前学習とし、授業内ではグループ内で内容や意味の確認をする。パターン・プラクティスを導入するIIIとIVの詳しい流れは次項で示す。

Section I：語彙の意味、発音、さらにセンテンスの中での用法を確認する。グループで確認

Section II：Listening、Dictationを通して大学生同士の会話内容を理解し、ダイアログの文

脈の中で会話の流れ、パターンの使われ方を把握する。グループで確認

Section III：2種類の定型表現とその使い方をそれぞれ2通りの例文（会話）を通して学習。
練習問題 Practice It：学んだ定型表現を応用し、学生自身の意見を反映して答える。ペアワーク

Section IV：トピックに関連した4つの質問と、提示された2パターンの答え方が提示
質問と答え方のパターンを習得。
練習問題 Your Turn：英作文とやりとり。テキストの例も参考に自身の答えを
準備し、会話のやりとりの練習をする。ペアワーク

アクティブ・ラーニングの一般的特徴のひとつに「学生自身の態度や価値観を探求することに重きが置かれていること」（Bonwell& Eison, 1991）が挙げられているが、教材の内容が学生にとって探求に値することが必要だ。この観点から、今回使用したテキストは、内容が充実している。テーマは身近な話題でありながらも、内容には大学生同士の議論を呼ぶ考えや主張が織り込まれているため、英語で自分の意見を表現することに学生が興味をもちやすい。例えば、テーマが family の場合では、家族の構成や人数を聞く、といった「話の取り掛かりとなる基本的な情報を尋ねる」話題から、Would you ever consider adopting a child?、Is it best to move out of one's parents' house after college?あるいは Do you think old people should live in retirement homes? など、学生たちの価値観や問題認識に関わる問題まで扱う。ここで学生が「思考」し、その内容を、英作文や会話で「発信」することで、アクティブ・ラーニングの核である「認知プロセスの外化」を促すことにつながる。パターン・プラクティスで表現力の基盤を形成するには学習者を喚起する内容が重要な要素になる。

4.3 パターン・プラクティスの導入方法

4.2で示した授業で、IIIとVIのパターン・プラクティス中心の活動に重点を置き、その流れを下に示した。基本的にモデル文のリピーター練習の後、個人で音読・暗唱、次にペアワークで練習する。IIIの定型表現の習得のための練習（パターン・プラクティス）とそれを用いて自分の意見を表現する練習（シミュレーション）、及びIVでトピックに関連する表現の習得（パターン・プラクティス）、さらに質問に自分の意見で答え、相手とのやりとりを行う（シミュレーション）練習である。

定型表現の語彙、文法等の説明の後、間違いの多い発音を確認する。コーラスで例文のリピーティング練習の後、個人で暗唱を目指して音読し、ペアワークで暗唱できているか確認し合う。次に自分の意見を反映させた応用文（シミュレーション）をペアワーク中心の学習に取り入れ、「単調さ」を軽減した。その際、担当教員が作成したチェックシート（資料①）を活用。このシートには発話のチェック欄、及び会話に関する内容を日本語で記しているの
で、学生は自分の意見や、聴き取ったペア相手の意見のキーワードを記入し、それを足掛か

りにインタビュー形式で会話を行う。チェックシートを使用する目的は、1)「意味の確認」モデル文の定着の確認と、自分を想定した、意味のあるフレーズの定着を図ること、2)「自己表現」学習した表現を用いた自分の意見の表現、及び聴き取ったキーワードをペア相手とのやりとりの足掛かりにすること。その流れと目的は以下の通りである。

	No.	Name.			
		Q	Q&A	yourself	Q&A
1		私たちは別の列に並んだほうがいいですか。			
2		コメディと演劇ではどちらが好きですか。			
3		人はその映画について何と書いていますか。			
4		お気に入りの俳優をどう説明しますか。			
5		どんな映画が好きですか。			
6		映画館に出かけるのと、テレビで映画を見ること、映画をレンタルするのは、どれが好きですか。			
7		映画を見る前に批評記事を読みますか。			
8		映画を見ているとき、何を食べますか。			

資料①

- (1) III の定型表現についての解説⇒(コーラス) リピート練習⇒(個人) 音読・暗唱
- (2) ペアワーク：例文のロールプレイ⇒定型表現の定着 (パターン・プラクティス)

(例：Do you ever get nervous? (チェックシート)
 - Walking alone at night can make me nervous.)
- (3) ペアワーク：(練習問題 Practice It) 定型表現を用いた自己表現 (シミュレーション)

(例：Do you ever get nervous?
 自分の場合を想定 can make me nervous. / makes me nervous.)
- (4) IV(その他の関連表現)についての解説⇒(コーラス)リピート練習⇒(個人)音読・暗唱
- (5) ペアワーク：例文のロールプレイ⇒定型表現の定着 (パターン・プラクティス)

(例：How would you describe your personality? (チェックシート)
 -- I think I'm easy going.
 -- Wow, it's hard to say. It depends on my mood.)
- (6) ペアワーク：(練習問題 Your Turn) 例文を参考に自分の意見を英作文→相手に伝え、さらに会話のやりとりをする。(シミュレーション)

(例：A: How would you describe your personality?
 B: I think I'm really _____, but sometimes I'm _____.
 How about yourself?
 A: Mostly I'm _____, Speaking of personalities,
 What puts you in a good mood?
 B: I'd have to say _____.)

ペアワークでは、最終的には互いが自分自身を想定した会話へ発展させることが目標であることを伝える。学んだフレーズを用いながら、できるだけ複数の文で答えること、また、

相手に質問を投げかけて、相手を理解するような会話をつないでゆくことを心掛けるよう促す。具体的には、例を挙げる、理由を述べる、代案を挙げる、など自分の意見を述べる方法、会話を発展させるためのパターンの習得を目指す。

ペアワークの間、担当教員は学生の席を巡回し、学生の事前学習として課している英作文（練習問題 Practice It :資料②）及び（練習問題 Your Turn :資料③）を添削する。先述の竹内（2003）が調査した成績上位者が実践したスピーキング学習法では、「しゃべろうとする内容を前もって考え、それを利用できるようにもっていくこと」などの計画性が特徴である（86）。書くことで、基礎文法の確認にもなり、テーマに対して学生が自分の意見をまとめる作業はスピーキングで「自己表現」するために欠かせないステップになる。また、英作文の添削の際、個別の質問に対応することは、教師と学生の「関係性の構築」（竹内2015；2）にも有効である。

<p><u>Practice it</u> Working in pairs, take turns asking the following questions. Answer using out of the above expressions.</p> <p>1. A: How would you describe your favorite band? B: _____</p> <p>2. A: Talk about a concert you recently saw in person or on video. How was it? B: _____</p> <p>3. A: Do any of your friends play an instrument? B: _____</p>
--

資料②（テキスト p.57）

<p><u>Your Turn</u> Now pair up your classmate. Practice the following conversation. Fill in the blanks with your own answers.</p> <p>A: Do you play an instrument? B: Actually, I _____. What about you? A: I _____. Of course, learning an instrument is one thing. Playing in a band is another. Have you been to any good concerts recently? B: Let me think.... Recently, I _____. How about yourself? A: Well, I _____. B: So, how do you usually buy music? A: Usually, I _____, but sometimes I _____.</p>
--

資料③（テキスト p.58）

4.4 オーラルテスト

オーラルテストは担当教員と1対1で、前期、後期それぞれ4回行う。2～3ユニットごとに、授業で扱った表現の中から、10組のQ & Aをモデル文として担当教員が作成した練習問題のプリント（資料④）を学生に配布しておく。一週間後のテストでは日本語のみのリストを学生に見せ、担当教員がその場で選択した5問に対して、日本語の内容を英語で表現させる。暗唱を授業外学習として課し、反復練習の成果をテストで確認する。うち1問は教員からの学生本人に関する質問にすることで、機械的な暗唱に陥らないように留意した。自分

1	旅行にはよく出かけますか。 --できる限り多く旅行します。	How often do you travel? --I travel as often as possible.
2	行ったことのない国に行くのは好きですか。 --もちろんです。機会があればいつでも初めての国に行きます。	Do you like visiting new countries? --Definitely. I visit new countries whenever I can.
3	いつも高級ホテルに泊まるのですか。 --とんでもない。できる限り高級ホテルには泊まらないようにしています	Do you usually stay at expensive hotels? --Not at all. I stay at expensive hotels as rarely as possible.
4	コンサートはいかがでしたか。 --とてもすばらしくて、気を失うかと思いました。	How was the concert? --It was so amazing I thought I would faint.
5	シルビアとカラオケに行ったそうね。彼女の歌はどうだったの。 --信じられないくらいひどいよ。本当だよ。	I heard you went out for Karaoke with Silvia. How is her singing? --It's so terrible it's hard to believe. No joke.
6	いつも音楽はどのようにして購入しますか。 --最近では、だいたいオンラインで歌を購入しています。	How do you usually buy music? -- These days I mostly buy songs online.
7	私たちは別の列に並んだほうがいいかしら。 --この列のままでしょう。ほかのよりも短いから。	Should we get in another line? --Let's stay in this one. It's shorter than the others.
8	コメディとドラマでは、どちらのほうが好きですか。 --ドラマです。コメディよりもずっと面白いと思います。	Are you more into comedies or dramas? --Dramas. I find them a lot more interesting than comedies.
9	あなたのお気に入りの俳優をどのように説明しますか。 --彼は世界で最もハンサムな男性です。	How would you describe your favorite actor? --He's the most handsome man in the world.
10	映画館に出かけるのと、家で映画を見るのではどちらが好きですか。 --私は映画をレンタルして、それを家で見るのが好きです。	Do you prefer going to theaters or watching films at home? -- I prefer renting films and watching them at home.

資料④

の意見を答える問題を含むことで「意味の確認」「自己表現」を行う。

4.5 オーラルテストの結果

1問1点計5点満点で評価したテストを7回実施し、平均は4.2点。多くの学生は4問の質問と答えの発話が概ねできている。出題範囲が決まっていることと、担当教員とのマンツーマンの口頭試験であることから、毎回3割ほどの学生が5点満点を獲得しており、8割以上の学生はかなり練習をして試験に臨んでいると見受けられる。授業内での反復練習の回数は限られているため、学生は授業外学習として反復練習を行う。次回のテストに向けて練習に集中することで、反復する「単調さ」は解消し、練習の成果を実感できる。

5 セルフアセスメント及びアンケート調査

今回のセルフアセスメントは、学生、教員それぞれへのフィードバックとして実施した。実施の目的は年間の授業を通して行ってきた発話の練習によって、最終的に表現の定着と自己表現能力がどの程度向上しているのか、学生が自分で確認した成果を明らかにすることである。学生は自分の成果や問題点に「気づき」、今後の学習の取り組みに生かすこと、そして教員は授業の改善を図ることが期待される。また、アセスメントの結果を踏まえた自由記述式のアンケート調査では、学生の授業に対する感想、意見、要望を参考に、担当教員が今後の課題とすることを目的とした。いずれも、他の学生との評価ではなく、それぞれが自分の上達度を把握する点を重要視した。

5.1 方法

対象：非英語専攻の文科系学科1年生3クラス計75名の学生（各クラス約30名）

4月の入学時に実施されたプレイスメントテストで最も一般的な中級クラスの学生。

授業：外国語必修科目前期15コマ・後期15コマ 2017年4月～12月週1回

実施：2017年12月22日

アンケート方法：前期の授業9ユニット（Unit1～9）また後期の授業7ユニット（Unit11～17）で扱った16のテーマに関するやりとりを評価する。評価は学生が自分自身で行うが、その際ペアを組ませておき、相手とのやりとりの中でどの程度自分の考えを表現することができたかをチェックさせる。最初の問いかけは担当教員が行い（例えば、教育・大学生活がテーマの場合、What's your major? など）、それに答える形で会話を進めるよう促す。受け答えをペアで取り組むことで、客観的に自分の発信力を判断する助けとなる。具体的には評価は次の2点について行う。

SELF-ASSESSMENT

目的：定型表現の定着度との到達度を知り、自分の問題点に気づくこと。

方法：授業で扱ったテーマについて簡単なやりとりができますか？ 質問をしたり答えたりした結果の欄に○をつけます。

できない：× 少しできる：△ だいたいできる：○ うまくできる（2文以上でなど）：◎

		×	△	○	◎
1	相手の家族について（親や兄弟、親戚など）大家族？				
1*	一緒に住んでいる？誰と？ * relatives				
2	友達とどこで待ち合わせをするか、会う頻度は？				
2*	何をして楽しむ？友達はどうな人？ *get together/do...for fun				
3	目上の人との関係、敬うべきかどうか				
3*	*respect/elders/be polite to / generation gap				
4	大学について、専攻は？どんなキャンパス？テストはどうだった？				
4*	卒業後は何をしたい？ *major in ... /on the test/ after graduating				
5	好きなスポーツについて、チームは勝てるか？				
5*	どんなスポーツをしているか？上手か？オリンピックは見る？				
6	将来の職業について				
6*	*work for a company, self-employed				
7	毎日の食事について、料理している？好きな食べ物は？				
7*	ダイエットしたことある？ *cook/favorite / go on a diet/work well				
8	英語の勉強法や大学の授業について何か困っていることは？				
8*	英語で得意なスキルは *have a problem with.../By... / fluent				
9	具合が悪い、風邪を引いた、熱があるなど体調が悪いことを伝える				
9*	*flu / get better /				
10	どの位の頻度で旅行に行く？これまでどこに旅行に行った？				
10*	休みは何してるの？ *on vacation				
11	映画について、どんな映画が好き？どこで観るのが好き？				
11*	*comedy/ SF/action / romance/ theater /film				
12	買い物について、何をかう必要がある？ネットショッピングは？				
12*	*a stationery store / do shopping on line /order				
13	インターネットについて、ネットショッピングは安全？				
13*	どんなサイトを閲覧する？ *blog/visit websites/twitter /Facebook				
14	天気について、春には雨が多い？天気予報を信じる？				
14*	竜巻はよく起こる？ *weather forecasts/ tornado				
15	元気がなさそうな相手に、どうかしたのか声をかける（答）自分の気分				
15*	を伝える ～だから幸せ、～のせいで気分が悪い *feel depressed				
16	自分の性格について話す、どんな時に気分がよくなる？				
16*					

授業の感想

資料⑤

1) 質問へ答えられたか。どんな答えが返せたか。その後さらにやりとりができるか。

2) 関連したテーマについて相手に質問を投げかけることができるか。

以上について、①できない ②少しできる ③だいたいできる ④よくできる という4段階で評価を行う。①は何も答えられなかった場合、②は、Yes, Noの答え、あるいは単語やフレーズのみで答えることができた場合に選択する。③は、短い一文で答えることができた場合、④はかなり自分の意見が表現できて、会話が続いたと感じる場合、例えば2文以上、あるいは長めの文章で答えを返すことができた、などの場合にそれぞれ選択する。尚、会話の足掛かりになるよう、各ユニットでテーマに関する語彙をいくつか参考のために挙げておいた。

5.2 セルフアセスメントの結果

授業で取り上げた16のテーマについて、英語で会話のやりとりがどの程度できたかを評価してもらった。テーマの内容、最近扱ったテーマかどうかによる違いはあまり見られず、全テーマを通した学生たちの自己評価は次の通りである。

①できない：1.8% ②少しできる：13.2% ③だいたいできる：48.6%

④よくできる：36.8%

この調査結果から、全体の85%が、「だいたいできる」、あるいは「よくできる」、と評価しており、日常生活についての基本的なやりとりが概ねできると評価していることが見受けられる。その中でも「自己表現」(自分の意見が言え、相手とのやりとりもできる)ができたと答えた割合は36.8%とかなり高い結果が出ている。この結果と先述した(3.5を参照)担当教員が7回にわたって1対1で実施したオーラルテストにおいて5点満点中4.2点という全体平均は、試験範囲や方法が異なるために単純に比較することはできない。オーラルテストでは、モデルの練習文を配布しているため、短期的な暗唱となってしまう要素が含まれる。一方、今回のセルフアセスメントでは出題範囲が広く長期的な定着の評価が可能になるが、学んだ定型表現のうち得意な表現や語彙を用いたことも十分に考えられる。(例えば「困った状態について話す」場合、1) I've been having a trouble with + O. 2) S + is giving me trouble.という二つの表現のうち、どちらか得意とするパターンのみを用いるなど。)しかし、こうした条件の違いを考慮しても学生が平均8割以上の話題について「だいたいできる」と高い評価を得た。

5.3 アンケート結果

学生には最後の欄で、授業全般についての感想を書いてもらった。特に自分の自己表現能力が4月の入学当初と比較してどう感じているか、セルフアセスメントを通して感じたことなどを例に挙げて、自由形式にした。多かったコメントは、「4月にはほとんど話せなかったが、今回の調査でかなり会話のやりとりができるようになっていた」「英語を話す自信が

少しついた」「自分が言いたいことを言えるようになって気持ちが良かった」と、英語の発話、さらには自己表現の上達による楽しさを感じるものが見受けられた。「忘れていたと思っていたがけっこう身についていた」という感想が多い中、「以前覚えた単語やフレーズをかなり忘れてしまっていた」と定着率の低さを感じた学生もいた。

また、ペアワークに関しては「実際にクラスメートと英語で会話することが楽しかった」「普段は話さない人と話さないような内容について考えたり話し合ったりして楽しかった」「他の人の意見や表現が聞けて参考になった」「相手が話したいことを手助けできたとき嬉しかった」など、多くの学生は積極的に「学び合い」、「人に教える」というペアワークの効果を実感していた。1対1で行うオーラルテストに関しては「緊張感もあるが楽しかった」「努力してうまく話せたときに爽快感があった」など、前向きなコメントが多かった。さらに、練習問題の英作文の添削に対しては学生からの要望も多く、「先生にチェックしてもらおうと自信をもって意見を言えるので頑張って英作文をしようと思った」、「自分の意見を考える機会になった」と、自己表現の満足感につながっていた。「思考」や「内省」の活性化、および学生の自己表現へのモチベーションに繋がる意見が見受けられた。

6. まとめ

授業にパターン・プラクティスを取り入れた結果、オーラルテストとセフルアセスメントにおいて、一定のコミュニケーション能力の向上がみられた。その要因はパターン・プラクティスのマイナス面への改善策とアクティブ・ラーニングの要素が以下のとおり有機的に結びついたことである。

- (1) コンテンツの充実：学習者に「気づき」を与える内容、「思考を活性化」へ導く話題、パターン・プラクティスの練習量に飽きずに取り組める学生主体の表現を選択することが重要。
- (2) 授業外活動の設定：反復練習を授業外に課し、パターン・プラクティスの「単調さの改善」と「練習量の確保」を図る。自宅学習の成果はグループ活動やオーラルテストで確認する。授業外活動を学習計画の中に組み込むことで、学生中心の活動の授業運営が可能になる。
- (3) 授業内活動での工夫：活動形態は「ペア活動」中心。リポート、音読、モデル文の暗唱や応用には「チェックシート」を活用して、表現の定着度を測る。互いに自分を「シミュレーション」した表現で会話練習する。練習方法を多様化すること、自分と相手との実際の会話へと表現の「バリエーション」をもたせることで実際のコミュニケーション力につながる効果がある。
- (4) 英作文作成：英語の基盤づくりと自己表現の両方に有効。「書く」行為が「思考を活性化」し、自然にそれを相手に伝えたいというコミュニケーションや自己表現への一番のモチベーションになる。英作文で事前に発言内容をまとめている学生は、自分の

意見を発話に結び付けやすく、最後のアンケートでも評価が高い傾向にある。

- (5) オーラルテスト：適度な緊張感と学習の達成感があるため、暗唱、反復練習に対する学習者の動機づけとなり、基本表現の定着度を高める効果が高い。結果を受けての振り返りにも有効。
- (6) セルフアセスメントとアンケート：教員、学生の両者に学習効果のフィードバックとして重要。学習した表現の長期的な定着度、自分の表現としての運用能力の向上、会話のやりとりの達成度に対する学習効果を確認することで、今後の課題を見つける手立てとなる。

7. 課題

暗唱練習の不足や基本的な英語力の問題で、定型表現の定着率が低かった学生への対策を今後検討したい。また、英作文の添削は、オーラルテストは学習への動機づけや効果にプラスに影響しており、いずれもアクティブ・ラーニングの重要な要素であるが、継続するには時間的に難しい。こうした課題に対して以下のような取り組みを検討したい。

- 1) 定型表現の定着が難しい学生には、モデル文の数を絞り込む。
- 2) テスト回数の見直し：セルフアセスメントやピアアセスメントを組み合わせる。
- 3) 英作文添削の工夫：学生同士が相互に添削し合う、あるいは学生が自分である程度英作文の訂正ができるよう、表現のポイントや英作文のひな型を複数提示することで学生の質問に対応する。

注)

- 1 「アクティブ・ラーニング推進に関する要項の考え方」資料1-3参照、佐賀大学教育委員会(2017)
- 2 ミシガン大学で開発された教授法で、Skinnerを中心とする行動主義心理学と Bloomfield が中心の構造主義言語学を理論的基盤とする。
- 3 Chomsky は言語習得を反復練習の結果とする Skinner の行動主義理論を批判し、言語獲得のメカニズムが人間に生得的に備わっていると主張した。
- 4 アメリカの人類学者・言語学者ハイムズ Hymes は、言語習得には Chomsky の提唱する「言語能力」だけでなく、社会的な規制に従った適切な言語運用能力「コミュニケーション能力」の必要性を示した。この概念に影響を受けて開発されたコミュニケーション・アプローチは、文法的能力、社会言語学的能力、方略的能力、談話能力のコミュニケーション4要素で定義づけられる。
- 5 平島 (2007) 79-81.
- 6 この点に関しては既に半世紀も前のアメリカで、Brown は (1969) が当時圧倒的な支持を集めていた Chomsky が提唱する幼児の言語獲得の場合と、言語体系の違う外国語の習得との違

いを検証し、母国語による影響を克服するためにパターン・プラクティスの有用性を主張した
("In Defense of Pattern Practice" 191)。

- 7 鎌倉義士「コロケーションを活用したパターンプラクティス作成と授業計画」『言語と文化』
No. 32 (121-134) 参照。
- 8 アクティブ・ラーニングの一般的特徴として挙げられる点のうちのひとつで、「問題解決のため
に知識を使ったり、人に話したり書いたり発表したりすること」。(1. 教育目標・内容と育
成すべき資質・能力について) 文部科学省 (2016)「教育目標・内容と学習指導、学習評価
の在り方に関する補足資料」ver. 3
- 9 この定義の詳細は (溝上2015)「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラー
ニング」(31-35) 参照。

参考文献

- 鎌倉義士 (2015)「コロケーションを活用したパターンプラクティス作成と授業計画」『言語と文
化』32, 121-134.
- 後藤正明 (2005) フーンコラム (26)「パターン・プラクティスは必要ですか」三省堂。
英語教育コラム https://tb.sanseido-publ.co.jp/english/column/huum_bn/026.html.
- 佐賀大学教育委員会 (2017)「アクティブ・ラーニング推進に関する要項の考え方」資料1-3.
- 武内理 (2015) 特集アクティブ・ラーニング「英語教育におけるアクティブ・ラーニングの実質化
を目指して」*Teaching English Now* Vol. 31 Fall 三省堂. 2-3.
- 武内理 (2003)『より良い外国語学習法を求めて』東京: 松柏社.
- 中井弘一 (2015)「英語教育におけるアクティブ・ラーニングの一考察」『OJU 教職活動報告・研
究』 Vol. 6, 136-149.
- 平嶋里珂 (2007)「コミュニケーション能力を養成するためのパターンプラクティス」『外国語教育
研究』 13, 79-95.
- 松下佳代 (2015)「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」『ディープ・アクティブラーニン
グ』松下佳代編, 勁草書房. 1-27.
- 溝上慎一 (2015)「アクティブラーニング論から見たディープ・アクティブラーニング」『ディ
ープ・アクティブラーニング』松下佳代編, 勁草書房. 31-50.
- 文部科学省 (2016)「教育目標・内容と学習指導、学習評価の在り方に関する補足資料」ver. 3.
- 文部科学省 (2017)「高大接続改革の実施方針等の策定について」
- 文部科学省 (2016)「2016年度英語力調査結果速報」
- Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). *Active learning: Creating excitement in the classroom*. ASHE-
ERICK Higher Education Reports. ([https://www.ydae.purdue.edu/lct/HBCU/documents/
Active_Learning_Creating_Excitement_in_the_Classroom.pdf](https://www.ydae.purdue.edu/lct/HBCU/documents/Active_Learning_Creating_Excitement_in_the_Classroom.pdf), 2018年1月5日検索).
- Brown, T. G. (1969). "In defense of pattern practice." *Language Learning* Vol. XIX Nos. 3&4, 191-203.